第９課　サタンと盟友

【暗唱聖句】

「竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残りの者たち、すなわち、神の掟を守り、イエスの証しを守りとおしている者たちと戦おうとして出て行った」ヨハネの黙示録 12章 17節

【日曜日・海の中から上がって来た獣】

「わたしはまた、一匹の獣が海の中から上って来るのを見た。これには十本の角と七つの頭があった。それらの角には十の王冠があり、頭には神を冒涜するさまざまの名が記されていた。わたしが見たこの獣は、豹に似ており、足は熊の足のようで、口は獅子の口のようであった。竜はこの獣に、自分の力と王座と大きな権威とを与えた」黙示録13：1、2

この海の中から上って来る獣とは何でしょう。海は群衆あるいはヨーロッパを象徴しており、そこから登場します。竜（サタン）はこの獣に、自分の力と王座と大きな権威とを与えたとありますから、非常に大きな権力をもち、サタンの支配下にあることがわかります。また、「この獣には十本の角と七つの頭があった。それらの角には十の王冠があり」、とあるように１０人の王たちを従えるような権力であることがわかります。これと似たような記事がダニエル書７：７，８にでてきます。

「この夜の幻で更に続けて見たものは、第四の獣で、ものすごく、恐ろしく、非常に強く、巨大な鉄の歯を持ち、食らい、かみ砕き、残りを足で踏みにじった。他の獣と異なって、これには十本の角があった。その角を眺めていると、もう一本の小さな角が生えてきて、先の角のうち三本はそのために引き抜かれてしまった。この小さな角には人間のように目があり、また、口もあって尊大なことを語っていた」ダニエル7:7、8

この海から上がってくる獣と、このダニエル書で預言されている第４の獣とは関連があるであろうと推測できます。そして、この第４の獣はローマ帝国のことなので、この海から上がってくる獣もローマ帝国、あるいはそれに関係する勢力であることがわかります。衰えが見え始めたローマ帝国を、時の皇帝ユスティニアヌスが法令を出し、教皇に絶大な権力を与えることによって、宗教的にヨーロッパ中の民衆の関心をローマに引き寄せようと考えます。ヨーロッパ各国の王がカトリックとなる中、3人の王はそれを拒みアリウス派となります。そこでローマは軍隊を派遣し、この三つの国を滅ぼします。これが三つの角が抜け落ちたとか、頭が７つということで象徴されています。その7つの「頭には神を冒涜するさまざまの名が記されていた」とあるように、これらの国々は神の民を迫害します。アリウス派の最後の王であったオストロゴス王セオドリックが５３８年に倒され、このときから実質的なカトリックの支配が始まります。

【月曜日・海の獣の活動】

「この獣にはまた、大言と冒涜の言葉を吐く口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた」黙示録13:5

カトリックが絶大な権力をふるうのは、「四十二か月の間」です。この数字は黙示録の中で何度も出てくる「1260日」、あるいは「ひと時とふた時と半時」や「3年半」と書かれてあるのと同じで、その日数の間猛威をふるいます。エゼキエル4：6にあるように、預言では１日を１年とするので、1260年間ということになります。538年から1798年の1260年間、カトリックの絶大な力がヨーロッパ中に及ぶということです。実際に歴史はこれが真実であることを教えています。1798年に自由を求めたフランス革命によってローマ法王は幽閉されてしまいます。そして、それがもとで死んでしまい約半年もの間ローマ法王不在の状態が続くのです。これが黙示録13:3にある「この獣の頭の一つが傷つけられて、死んだと思われたが」と、書かれてあることの成就です。

　この獣は何をするのでしょう。「大言と冒涜の言葉を吐く口が与えられ…神を冒涜し、神の名と神の幕屋、天に住む者たちを冒涜し」ます（黙示録13：5，6）。神様を冒涜するとは、自分を神様のような立場に置くことを意味しています。このことは他の箇所でも預言されてます。

「だれがどのような手段を用いても、だまされてはいけません。なぜなら、まず、神に対する反逆が起こり、不法の者、つまり、滅びの子が出現しなければならないからです。この者は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して、傲慢にふるまい、ついには、神殿に座り込み、自分こそは神であると宣言するのです」第二テサロニケ2：3，4

「彼はいと高き方に敵対して語り、いと高き方の聖者らを悩ます」ダニエル7：25

カトリックでは救いは信仰と行いと教えていますが、それはキリストのとりなしの働きを無効にするものです。また罪の赦しについても、祭司が間に入ります。神様にのみ属する権力を横取りすることが冒涜の本質です。

【火曜日・地中から上がって来た獣】

「わたしはまた、もう一匹の獣が地中から上って来るのを見た。この獣は、小羊の角に似た二本の角があって、竜のようにものを言っていた」黙示録13:11

ここにもう一つの獣が地中から登場します。この獣は小羊の角に似た二本の角があり、最初は無害に見えますが、やがて竜のようにものを言うようになっていきます。この獣は地中から登場するわけですが、地中は12章において竜が吐き出した水を飲み干してくれた大地と同じで、アメリカ大陸を指しています。アメリカはカトリックから逃れた清教徒たちの逃れ場となり、彼らのよって開拓された国でした。だから子羊に似た角を持っているのですが、やがて迫害する側にまわり、竜のように高慢になっていきます。このような預言を前に、神様は次のように語っています。

「耳ある者は、聞け。捕らわれるべき者は、捕らわれて行く。剣で殺されるべき者は、／剣で殺される。ここに、聖なる者たちの忍耐と信仰が必要である」黙示録13：9，10

「捕らわれるべき者は、捕らわれて行く」。私たちの心はいつも何に捉えられているのでしょうか。永遠の御国でしょうか。それとも、朽ちるべき、この世のものでしょうか。神の愛でしょうか。それとも、世の憎しみでしょうか。キリストでしょうか。キリスト以外のものでしょうか。ここに聖なる者たちの忍耐と信仰が必要になってきます。

【水曜日・獣の像】

「この獣は先の獣が持っていたすべての権力をその獣の前で振るい、地とそこに住む人々に致命的な傷が治ったあの先の獣を拝ませた。そして、大きなしるしを行って人々の前で天から地上へ火を降らせた」黙示録13:12、13

先の獣であるローマ法王の力を借りてさらに権力をふるい、最後には先の獣であるローマ法王を拝むように強要する国となっていきます。その際に「致命的な傷が治ったあの先の獣」と描写されています。フランス革命によって一時途絶えてしまったローマ法王ですが、その後復活し、徐々に力を付けて、今では中世時代よりも多くの信徒が世界中にいて、政治的にも大きな力を持つようになっています。2018年には歴史上初めてアメリカにも訪れ、大きな話題となりましたが、預言の成就が着実に進んでいることがわかります。

また、アメリカは大きなしるしを持って自分の力を誇示します。その象徴が天から火を降らせることだと書かれてありますが、日本人は原爆のことを連想するのではないでしょうか。アメリカは世界で唯一原爆を落とした国です。ただ、聖書的に天から火を降らせるといえば、エリアを連想させます。エリアは預言者の代表です。つまり偽預言者が起こり、間違った方向へと人々を導いていくということです。黙示録13：14に「更に、先の獣の前で行うことを許されたしるしによって、地上に住む人々を惑わせ」るとありますが、心霊術も含めて人々が正しい判断ができないように、数々のしるしが行われるようになっていくでしょう。

さらに「また剣で傷を負ったがなお生きている先の獣の像を造るように、地上に住む人に命じた。第二の獣は、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた」（黙示録12：14，15）と続きます。獣は悪魔の力によって起こるしるしで人々を惑わせた上に、獣の像を拝ませるように誘導していきます。ダニエルの時代に起こった金の像の問題が、再びこれから世界規模で起きてくることでしょう。

獣の像を霊的とは具体的に何でしょうか。それは獣をよく表す象徴的なシンボルであり、アメリカがそれを造って、それを拝まないと殺させるとあることから法的な拘束力を持つもの、すなわち日曜休業令のような第7日安息日ではなく、日曜日に礼拝させようとするものであろうと思われます。背教のプロテスタント教会がカトリックと急接近し、日曜日を強制的に礼拝させるように政治的働きかけていくとき、わたしたちは真の安息日を守るかどうかが問われることになるでしょう。

このアメリカとローマカトリックとの融合は、政治と宗教との融合です。それはかつてローマ帝国がしたのと同じであり、また日本でも天皇陛下を神として政治的に利用し、恐ろしい戦争へと突入していきました。政治と宗教との融合は、歴史的に何度も繰り返されてきたことなのです。そして、その結末は常に恐ろしいものでした。これが最終時代に世界レベルと起こるわけですが、それがいま着々と進行しているのです。

【木曜日・獣の刻印】

「また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべての者にその右手か額に刻印を押させた。そこで、この刻印のある者でなければ、物を買うことも、売ることもできないようになった。この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である」ヨハネの黙示録13章16、17節

獣の刻印が右手か額に押されます。右手は行為を象徴し、額は思考を象徴しています。右手に刻印を押される場合は、迫害などを恐れて不承不承ながら外面的だけは便宜的に獣に合わせようとする人々、額に刻印が押される人は、全く獣に帰依していく人々を現わしているのでしょう。ちなみに、神の印を押されるものは額のみに押されます。獣の刻印を受けたものだけが物が買ったり売ったりできます。逆に言えば、神の印を押されたものたちは買ったり売ったりできない、つまり、この世の仕事はもはやしないで助け合いながら生きていくのでしょう。

「この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である。ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は六百六十六である」黙示録13：17、18

獣は数字で表すことができます。この数字はネロのヘブル語を数字にすると666になるので、当時のクリスチャンはネロに当てはめたことでしょう。またSDAはローマ法王に当てはめます。法王の王冠に刻印されているラテン語で「神の子の代理」を意味する"Vicarius Filii Dei"のローマ数字部分を足し合わせると666になる。